



Title	在住外国人は日本社会への新メンバーか：地域日本語支援活動のあり方の再検討
Author(s)	西口, 光一
Citation	多文化社会と留学生交流：大阪大学留学生センター研究論集. 2006, 10, p. 61-64
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50650
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

在住外国人は日本社会への新メンバーか －地域日本語支援活動のあり方の再検討－

西口 光一*

要 旨

地域日本語支援活動では、「教室の外にある現実の社会で日本語を使って何かができるように、教室の中で日本語を学ぶ/指導する」という観点で活動が展開されている。このような観点は、その活動において、日本語の学習と支援を前景に押しだし、参加者相互の交流という地域日本語活動におけるもう一つの重要な役割を後景に押しやってしまう。本稿では、これとは逆に、参加者相互の交流を前景とし、日本語の学習と支援を後景とする活動のあり方を提案する。

【キーワード】地域日本語教育、スピーチコミュニティ、在住外国人、日本語母語話者、対話的コミュニケーション

1 問題の所在

スピーチ・コミュニティという概念は社会言語学で確立されている概念であり、コミュニケーションの民族誌の中心的な概念である。スピーチ・コミュニティは当初は言語規則を共有する人間集団である (Bloomfield 1933) と考えられていたが、社会言語学が展開されるにつれて、話し方の規範 (Labov 1966) や言語使用に見られる一定の規則性 (Fishman 1971) を共有していることが強調されるようになった。そして、現在では、言語的規則と社会言語的規則の両者を併せて共有する人間集団であると一般的に考えられている (Hymes 1974)。

A speech community is defined, then, tautologically but radically, as a community sharing knowledge of rules for the conduct and interpretation of speech. Such sharing comprises knowledge of at least one form of speech, and knowledge also of its patterns of use. Both conditions are necessary.

(Hymes 1974: 51、下線は筆者)

スピーチ・コミュニティというのは、逆の観点から

言うと、「一つの言語（あるいは言語変種）」というものを特定するための単位であるとも言える。すなわち、その中のメンバーの間で規則の知識を共有しているのが一つのスピーチ・コミュニティであり、一つのスピーチ・コミュニティの中ではメンバーの間で規則の知識が共有されているということから、一つのスピーチ・コミュニティで話されている言語が、（他のスピーチ・コミュニティで話されている言語と対立をなす）一つの言語（あるいは言語変種）として認定されることになる。つまりは、「○○コミュニティの人たちは○○語を話す」ということになる。

日本語という言語が識別可能な一つの言語として存在すると仮定すれば、それを使って政治的、経済的、文化的、社会的な営みをしている人間集団が日本語のスピーチ・コミュニティだということになる。日本列島上のみに限定して考えると、未成年者をまだ言語的に未成熟であると考えて除外するとして、ざっと1億人の人がこのスピーチ・コミュニティのメンバーとなる。この約1億人を「日本育ちで、両親が日本人で、日本国籍を持っている」という条件で篩にかけて、ごく一部が除外されるだけで、おおむね1億人という数字は変わらないであろう。この集団は、その規模においても、また一つのエスニック・グループとしての

* 大阪大学留学生センター教授

文化や歴史や言語の共有意識に基づく凝集性という点においても、日本列島における巨大な支配的集団であり、この集団に属するメンバーは、その集団の巨大さゆえに、「日本列島上の社会＝わたしたちの社会＝日本語コミュニティ」というふうに、素朴にこの3者を等号で結びがちである。

この言語コミュニティの中にある言語的な多様性については当面注目しないこととすると、日本語コミュニティで話されている日本語には一定の言語的規則だけでなく、社会言語的な規則も存在することとなる。そして、新たに日本の土地で暮らすようになった在住外国人は、日本語コミュニティの人たちから「わたしたちの社会で生活するのなら、日本語を、わたしたちがそれを話すように、話せるようになってください」と陰に陽に要求されるのである。

2 在住外国人＝日本語コミュニティの新メンバーか

バフチン（1988）が言うように、「人間の活動領域は多様である。しかもそのすべてが、言語の運用に結びついている」。上述の日本語コミュニティはきわめて巨大で、社会としてのあらゆる要素を包括的に備えたコミュニティである。それゆえそこには、生活や文化の基盤としての社会の要素として必要なあらゆる種類の活動領域が存在していると言ってよい。そして、そのすべては言語の運用に結びついている。

在住外国人は、日本列島にある社会という意味での日本社会に入ってきてそこで暮らすようになった人ではある。しかし、日本で暮らすことは即日本語コミュニティの新メンバーになること、とはならない。実際、入国、居住、就職、就学などのための一通りの手続きが済んだあとは、家庭と職場と同じ国の出身者のコミュニティという3つの場所を生活空間として日本での生活をしている外国人は多数いると見られる。また、在住外国人の中には、「日本語を身につけたい」や「日本人の友人を作りたい」などの理由で地域の日本語教室に通う人も一方で多数いる。しかしそのような場合でも、こうした行動や態度イコール「日本語コミュニ

ティのメンバーになりたがっている」と見なしてよいものだろうか。

3 地域日本語支援活動の現実

地域日本語支援活動においては、支援者側の姿勢として、「外国人参加者を同じ地域に暮らす隣人として対等に扱うこと」や「外国人参加者だけが学ぶのではなく相互学習の場と位置づけること」などがしばしば強調される（新庄他 2005）。しかし、実際の教室の様子を見てみると、日本語を「教える一学ぶ」という種類の活動が行われていることがほとんどである。バフチン（1989）は、ことばの現実となっているのは、「発話によって実現される言語的相互作用という社会的出来事」であると言っている。つまり、わたしたちは相互に発する発話を通して社会的な現実を時々刻々と構成しているのである。このことを考えると、地域日本語活動の場において専ら教授一学習的な形態の活動を行う限り、わたしたちは、「学習者」あるいは「日本語非母語話者」である外国人参加者、そして「学習支援者」あるいは「日本語母語話者」である日本人参加者という二元論的な役割関係を再生産し続けることになる。これは果たして、地域日本語支援活動が本来目指しているところであろうか。

一方、日本語教育や日本語学習支援を考える場合に一般的に「教室の外にある現実の社会で日本語を使って何かができるように、教室の中で日本語を学ぶ/指導する」と考えがちである。しかし、地域日本語教室に通っている在住外国人にとって差し迫った「教室の外にある現実の社会」というようなものが本当にあるのだろうか。もちろん、料金請求の通知（らしきもの）や子供の学校からのお知らせを読んだり、学校の先生に手紙を書いたりするなどの当面の「教室の外にある現実の社会」への対応の必要性はしばしば生じるであろう。しかし、すでに日本語がかなりよくできる外国人の場合は別として、地域の日本語教室に来ている外国人の大部分を占める、日本語がまだほとんど話せない人や話し方がまだつたない人の場合には、「教室の外にある現実の社会で日本語を使う」ということは、

はるかに先のことであるように思われる。それよりも、実は、日本語教室の外国人参加者にとって差し迫った日本語使用の必要性あるいは日本語使用の期待は、現に日本語教室に来ている日本人参加者や他の外国人参加者とコミュニケーションをすることにこそある、と見たほうがよいのではないだろうか。

4 発想の転換

地域の日本語教室に通っている在住外国人で、日本語教室の他に1週間の間にトータル2時間以上、日本人と専らおしゃべりをする機会を持っている人がどれほどいるだろうか。そのことを考えると、地域の日本語教室こそが、現在の日本社会をマクロ的に見て、日本人と在住外国人とが日本語を媒介として親しく接触する非常に貴重な機会であることが分かる。しかしながら現状では、そのような貴重な機会に、目の前の現実の対話者になりうる外国人参加者を相手に実際の「社会的出来事」(バフチン 1989)を構成するのではなく、はるか彼方の「教室の外にある現実の社会」への参加に向けて、そこで使われる日本語の教授一学習的な活動や一般的な日本語の教授一学習の活動が日々再生産されているのである。

このような状況を打破するためには大きな発想の転換が必要であろう。それは、「教室の外にある現実の社会で日本語を使って何かができるように、教室の中で日本語を学ぶ/指導する」という発想を捨てて、「教室こそが、参加している外国人にとって日本語が使える、あるいは、まず使えるようになるべき現実である」と考えることである。こうした見方は、通常の地域日本語教室の状況が概ね同数の外国人参加者と日本人参加者で構成されていることから言っても、強く強調されるべき見方であると思われる。

端的に言うと、地域の日本語教室は、ペアになって個別に日本語を学習一学習支援する場ではなく、そこに参加する外国人と日本人あるいは外国人同士が日本語で交流をする社交の場であると考えるのである。その社交の場では、通常の社交の場合と同じように、自分のこと、家族のこと、友人のこと、自分の故郷のこと

と、最近の出来事、食べ物のことや料理のこと、先の休日のこと、休みの計画などが話される。もちろん、扱われる話題は個々の外国人の現下の日本語力を配慮したものとしなければならないし、具体的な日本語の話し方も相手の日本語力を配慮した抑制した話し方でなければならない。そうでないと、活動そのものが成立しないであろう。そして、こうした社交の活動をしつつ、その活動を構成していく中で、その話題について話すために必要な言葉を提供し、必要な文法を補い、また適宜に発音の手当を行うのである。学習者の状況に応じて利用可能な文字を活動の補助として使用することは当然奨励される。また、文字の指導も、必要や希望に応じて加味していくのが適当であろう。

そして何よりも重要なことは、社交の場らしく誰もが心地よく時間を過ごせるようにすることである。つまり、外国人参加者が日本語を話すことを過度に要求されて苦しい思いやいやな思いをしたり、うまく話せないために負い目を感じたりすることがあってはならない。また日本人参加者も、外国人参加者からの日本語についての質問に対して現在の自分の力を超えた責任を感じる必要はないであろう。

このように発想の転換をすると、これまで再生産されてきた「学習者一学習支援者」という外国人参加者と日本人参加者の非対称的な関係性も根本的に変わってくるであろう。両者は社交という社会的出来事を協働して構築していく共働者となる。そして、こうした状況では日本語力の非対称性は、外国人参加者側の問題ではなく、社会的出来事を引き起こすために両者が協働して克服しなければならない共同の課題となるのである。

5 当面の結論

地域の日本語教室に通う在住外国人は、抽象的な日本語コミュニティへの現在及び将来の新メンバーではない。むしろ、少なくとも当面は、日本語使用場面としては主として地域の日本語教室に活動範囲が限られた、限定的な接觸機会への参加者であると見るのが適当であろう。地域の日本語教室ではこれまでのように

教授一學習的な形態の活動が行われるのではなく、在住外国人と日本人あるいは在住外国人同士が交流する社交の場とするのが適当であろう。つまり、日本語学習支援を前景 (foreground) とするのではなく、社交的活動を前景として日本語習得支援を後景 (background) とするのである。別の言い方をすると、教室の中で、教室の外にある日本語コミュニティで使うための日本語を学習/学習支援するのではなく、教室そのものを新たな「日本語コミュニティ」とするのである。そこで話される日本語は、外国人の観点から見た学習対象である "Japanese language" や "lingua Japonēsa" や「日文」などでもないし、日本人同士が社会的な活動を構成するために話す「日本語」でもない。それは、その場の当事者である外国人参加者と日本人参加者との間で時々刻々展開される活動を取り持ついわば「第3の日本語」である。そのような意味でこの言葉を「ニホンゴ」と呼んでもよいであろう。また、「ニホンゴ」で取り持たれる活動の歴史を重ねる地域日本語教室のコミュニティは、いわゆる日本人たちで構成される日本語コミュニティに対して、新たな「ニホンゴコミュニティ」と呼ぶのがふさわしいであろう。本稿で提案している地域日本語教室のあり方は、まさしくこの「ニホンゴコミュニティ」の創造なのである。そして、在住外国人の人たちは、最終的に日本語コミュニティのメンバーとなるか否かは個々人によって異なるとして、まずはこの「ニホンゴコミュニティ」におけるメンバーシップを確立するのが適当であろう。

言語的・文化的な背景を異にする人々の間でのこのようなコミュニケーションあるいは社会的出来事を取り持つのは、現代日本語にとって初めての経験だと言ってよいであろう。こうした相互行為実践を通して、これまで比較的同質的な人間集団の中での活動を取り持ってきた日本語が、異なる言語的・文化的背景や価値観を持つ人々の間で行われる活動を取り持つ対話的柔軟性を備えた共生言語へと成長していく可能性がある。地域日本語支援活動に期待されることは、在住外国人に日本語と日本の文化や習慣や日本人の物の考え方までを含めた「日本リテラシー」を身につけさせること

ではないであろう。むしろ、教室での交流を通して参加する外国人と日本人が良き隣人的な関係を築き、社交のための異文化間の対話的コミュニケーションを実践することを通して、外国人が新しい言葉としてニホンゴを徐々に身につけていくとともに、参加する日本人も対話的柔軟性のあるニホンゴの話し方を身につけていくことこそが、地域日本語支援活動に期待されていることではないだろうか。

付言

本稿は、2005年9月17日（土）・18日（日）に、早稲田大学総合学術情報センター国際会議場で開催された「国際研究集会 ことば・文化・社会の言語教育」での筆者の口頭発表「地域日本語支援活動におけるリテラシーのデザイン」を加筆・修正したものである。

参考文献

- Bloomfield, L. (1933). *Language*. New York: Holt & Company.
- Fishman, J. (ed.) (1971). *Sociolinguistics: a brief introduction*. Rowley, Mass: Newbury House.
- Hymes, D. (1974). *Foundations in sociolinguistics: an ethnographic approach*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Labov, W. (1966). *The social stratification of English in New York City*. Washington, D.C.: Center for Applied Linguistics.
- ミハイル・バフチン著、桑野隆訳（1989）『マルクス主義と言語哲学』未來社
- ミハイル・バフチン著、佐々木寛訳（1988）「ことばのジャンル」『ことば 対話 テキスト』ミハイル・バフチン著、伊藤一郎他訳、新時代社
- 新庄あいみ、服部圭子、西口光一（2005）「共生日本語空間としての地域日本語教室—言語内共生を促進する新しい日本語活動とコーディネータの役割」『言語の接触と混交—共生を生きる日本社会』（大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」報告書）